

「音楽表現指導法」

～理論と実践指導力の育成～

The Method of Instruction in Music Expression

:Training of a theory and the practice leadership

平澤節子

Hirasawa Setsuko

キーワード：保育現場、音楽活動、保育内容、実践指導力

はじめに

保育現場における音楽活動は歌、合奏、音楽劇など様々である。保育者養成校ではこれら活動に関する知識や学生自身の実技力を向上させるだけでなく、保育現場における指導力の育成が求められている。

本学幼児教育学科では「音楽表現指導法」が一年次前期に開講され、幼児の音楽表現とその活動についての考え方を学びながら表現力を高め、幼児の活動を援助するために必要な技術＝指導力の習得を目指している。指導力とは本来、関連する専門知識と実技の鍛錬の上に指導論と実践経験とが積み重なって育まれるものであるが、本学のような保育者養成短期大学には時間制約があり2年間はあまりに短い。

本稿は筆者の担当する「音楽表現指導法」の3年間の授業を振り返り、保育現場における音楽活動を検証し、保育者への聞き取り調査結果を基に保育現場に求められる音楽技術を探りながら、養成校における音楽実技と指導力の養成について考察するものである。

1、幼児と音楽

1) 生活の中の音楽

保育現場は常に音楽で溢れている。保育の一日の流れを音楽と共に追ってみると、登園後の朝の会では“おはよう”の挨拶の歌から始まり、続いてその季節や行事に関連する歌を歌う。絵本や紙芝居が読まれる時にも、手あそびうたなどで導入される事が多い。午前中に行われる一斉活動（主活動）の時間では、音楽を伴ったゲームやあそび・手作り楽器の制作・スズやカスタネットなどの簡易楽器演奏など音楽に関連した活動もみられる。片付けの場面では、保育者がピアノであらかじめ決められている曲を奏するだけで、子どもたちが今まで使っていた物

や遊んでいた物を片付ける合図になっている園も多い。昼食の場面では、“手を洗い、よく噛んで食べる”などしつけに関する歌や食べ物に感謝する歌、また園の宗派によってはお祈りの歌などが歌われる。昼食後は歯磨きを促す歌や仕上げ磨きの歌があり、午睡時にはオルゴール音や子守唄などがBGMとして流される。午睡明けのおやつの中には3時のおやつの歌があり、降園時の帰りの会では“さようなら”などの挨拶の歌が歌われる。全ての園がこの通りではないが、音楽は保育現場における様々な場面と密接に関わっているのである。朝の歌・お片付けの曲・お昼の歌・午睡のBGM・おかえりの歌など、毎日同じ曲を同じ場面で繰り返し歌い聴くことで、規則的な生活リズムを養うことができるのである。幼稚園や保育所は、それまで各家庭で思い思いに育てられてきた子どもたちが初めて集団生活を送る場で、就学までに基礎的な生活習慣や態度・健全な心身といった人間としての根幹部分を養う機関である。言語とその理解が発達途上にある乳幼児にとって歌うことは話すこと、つまり言語習得に関連しており、歌のメッセージ（歌詞）がメロディと共に記憶として蓄積される。歌うことを通して生活習慣や日本の四季や文化を体得していくのである。つまり音楽には文化としての側面と教材としての側面があるのである。

2) 保育現場における音楽活動

保育現場における幼児の音楽活動は、概して「歌う」・「楽器の演奏」・「鑑賞」・「音楽に合わせて体を動かす」・「音の創作」・「音楽劇」の7つに分ける事が出来るであろう。「歌う」活動では、1)で述べたような保育活動の歌（朝の歌・昼の歌など）の他にも、季節や行事の歌、例えば季節が夏なら「海」や「水あそび」・「七夕」などの童謡唱歌を始めとし、「南の島のハメハメハ大王」・「アイスクリームのうた」・「おぼけなんてないさ」などの現代曲が日常的に歌われている。「楽器の演奏」活動では、カスタネットやスズ・タンバリンといった簡易楽器（リズム楽器）を用いた簡易アンサンブルから鍵盤ハーモニカ（ピアニカやメロディアン）の演奏が行われている。「楽器の演奏」は園の行事の中で発表という形で行われる事が多く、運動会では鼓笛隊（鼓隊）、音楽会では複数の楽器による合奏や鍵盤ハーモニカが発表されている。保育現場における「鑑賞」は、私たちが静かに座って音楽にじっと耳を傾けるという形のものではなく、子どもたちに新しい歌の導入時に模範として演奏（範奏）する形で行われる事が多い。また歌に合わせたペープサートやパネルシアターも鑑賞のひとつとあってよいであろう。「音楽に合わせて体を動かす」活動では、「あぶくたった」や「なべなべそこぬけ」のようなわらべうたや、「イスとりゲーム」のように音楽に合わせて円状に歩き、音楽がストップしたところでイスを取り合う音楽あそびを始めとし、リトミックのように音楽の速い・遅い、音の高低に合わせて何かに扮して身体表現を行う活動、またお遊戯や体操も音楽を伴う活動として捉えることができる。「音の創作」では、手作り楽器の制作がある。でんでん太鼓やマラカス（空のペットボトル、または紙コップを二つ向かい合わせにした中に砂やどんぐり・小石などを入れたもの）を作り音色を楽しむものであるが、音楽の活動であるとともに、造形創作活動の要素も兼ねた表現活動ということができる。「音楽劇」では、前述のパネルシアターも白布を舞台に見立て、

その上で物語が展開される意味では音楽劇であるが、代表的なものにオペレッタが挙げられる。歌や台詞によって物語を演じ、その中で踊りや楽器演奏が含まれるなど一つの演目に様々な要素が含まれた音楽活動のことで、音楽会やお遊戯会など園の行事の中で発表される事が多い。

本節では保育現場における音楽活動を7つ挙げてみたが、これらの活動は養成校で学ぶ音楽技術に関連する「器楽(ピアノ)」、「声楽」に限定した活動ではなく、合奏指導や編曲アレンジ、また教科の垣根を越えて「国語」や「図画工作」・「(身体表現としての) 体育」・「演劇」などの要素が融合した活動であることが分かる。従って保育者にもそれら音楽活動を行う際に幅広い知識と指導力そして柔軟な応用力が求められるのである。

3) 保育内容における音楽

幼稚園や保育所では幼稚園教育要領や保育所保育指針に定められる保育内容に基づき保育が行われ、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域から構成されている。具体的には、心身の健康に関する領域「健康」、人のかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」というように、ねらいと内容を幼児の発達の側面からまとめられ、示されている。5領域の各ねらいは以下のとおりである。

「健康」

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。

「人間関係」

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。

「環境」

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

「言葉」

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

「表現」

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造力を豊かにする。

幼児の音楽活動に関しては、以前6領域として「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の中の「音楽リズム」に位置付けられていたが、1989年の幼稚園教育要領の改訂により「音楽リズム」と「絵画製作」が削除され、新しく「表現」という領域が設けられた経緯がある。上記のねらいを一見して音楽活動は領域「表現」に収まったかのように映るが、果たして音楽活動＝「表現」なのだろうか。保育現場における音楽活動で述べたとおり、幼児の音楽活動は非常に広範的で学校教育における様々な教科の要素を含むため、5領域すべてに音

楽が深く関連しているように思う。

例えば、幼稚園教育要領の領域「健康」の内容(6)「健康な生活のリズムを身に付ける」や、内容(8)「幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しを持って行動する」ために、保育の様々な場面で歌った生活の歌があり、これらの歌を歌うことで活動を切り替え、生活リズムを養うために用いられている。また領域「人間関係」の内容(1)「先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう」や、(8)「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする」活動として、音楽では合奏やマーチングバンドなどがある。音楽会や運動会に向けて練習を積み重ね発表することで、団結力や達成感そして喜びを共有することができる。領域「環境」の内容(3)「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」ために四季や生活、伝統文化に関わる歌が歌われ、また関連して領域「言葉」の内容(7)「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く」為にも歌が深く関与している。

このように、音楽は保育のねらいと内容を達成させるために様々な保育の場面で用いられていることが分かる。領域「表現」はもちろんのこと5領域全てに関わるため、保育現場における音楽活動の意義は大きいものと考えられる。

2、「音楽表現指導法」について

1) 本学の音楽カリキュラム

本学、上田女子短期大学幼児教育学科では、2年の在学期間に幼稚園教諭二種免許と保育士資格の取得を目指している。授業科目は、教養科目をはじめ幼児教育に関する専門科目の知識の部分と、音楽・図画工作・体育・国語などの基礎技能とそれに関する指導法の科目いわば保育技術から成り立っている。音楽に関する科目では、「器楽」・「声楽」・「音楽理論」・「音楽表現指導法」がそれぞれ独立して開設されている。まず一年次の必修として「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」(MLによるピアノ演習)と「声楽Ⅰ」・「声楽Ⅱ」が前期・後期にわたり開講され、「音楽理論」、「音楽表現指導法」が前期にそれぞれ開講されている。二年次には選択科目になるが、「器楽Ⅲ」・「器楽Ⅳ」が開設され2年間を通してピアノ演習が受講できる仕組みになっている。ピアノの技術は保育現場では必須であり、幼稚園や保育所との連絡会においても、学生の在学中にきちんと習得してきてほしい事項の上位に挙げられている。本学の器楽指導は学生のピアノ学習経験に応じ習熟度別に授業を行っているためか、ピアノ初心者やピアノ学習未経験という学生が比較的多く入学してくる。これらの学生への配慮として、一年次必修の「器楽Ⅰ」・「器楽Ⅱ」で不可という成績がついても、単位不認定にはせず「再履修」とし、保育者として必要最低限のピアノ演奏技術が習得できるよう、教員1名に対し多い時はTA(ティーチング・アシスタント)を2名配置し、より細かく丁寧な指導を行っている。保育における音楽の重要性からも、本学では音楽関連科目が非常に充実しており、指導にも力を入れているのである。

2) 「音楽表現指導法」の内容

筆者の担当する「音楽表現指導法」の授業は前述のとおり、一年次前期の必修科目であり幼児教育学科の全学生が受講する。授業の形態は演習となっており、関連知識を学びながら実践力の習得を目指している。授業内容は大きく「手あそび」・「子どもの歌」・「合奏」・「音楽行事」の4項目から成る。授業ではまず各項目の基礎知識や保育現場における活動のねらいや考え方を学習し、次に学生が教室の前に立ち他学生を子どもに見立てて実演し、子どもへの見せ方や伝え方などの指導法が適切であったかを検証していくものである。

まず一つ目「手あそび」では、その遊びに含まれる教育的要素に気付かせ、何を目的に歌った遊び歌なのかを理解しながら、話しかけ方や歌声のテンポやトーン、視線の置き方や示し方、顔の表情などを実践しながら学び、既存の手あそび歌の歌詞や動作に変化を加えながら応用力を養っている。二つ目「子どもの歌」では、歌詞の理解そして正しい音程で歌うことの大切さを学んでいく。新しい歌を覚えるときその手本となるのが保育者の歌声である。子どもは旋律と歌詞を繰り返し模倣することで歌を習得する為、保育者には正しい音程と音楽的な表現力を持って歌うことが望まれる。加えて前述の「手あそび」などは手の動作が伴う為ピアノを弾きながら行うことができない。つまり無伴奏「アカペラ」の状態実践する為、正しい音感と歌唱力が問われる。授業内でもピアノ伴奏なしで子どもの歌を歌うことがあるが、ピアノで開始音を示さないと低い調(低いKey)を好んで歌う学生や、始めは正しいKeyで歌っていても徐々に音程が下がる学生や、また歌によってはそもそも間違ったメロディで覚えてしまっている学生さえいる。授業では「子どもの歌」の指導法として、ピアノ伴奏を伴う指導法と教材を使用しながら無伴奏で行う指導法を伝え、一人一人実践形式で発表を行っている。三つ目「合奏」では、保育現場で一般的に使われるスズ・カスタネット・タンバリン・トライアングルなどの簡易楽器の正しい扱い方(持ち方と鳴らし方)の基礎から学ぶ。そして同じ楽曲を3歳児向けと5歳児向けに編曲したものとを合奏し比べて、年齢に応じた合奏編曲の重要性和記譜法を学びながら学生自身が合奏編曲をしてグループ発表を行っている。記譜に関しては、「音楽理論」で学ぶ音価の理解が伴わないと楽譜に起こすことは難しく、不得手な学生も多いが、合奏の実践を経てリズムの組み合わせの面白さや響きの美しさを体感し、アンサンブルをとおしてグループ内の結束が深まる過程を自ら経験する学生が多い。「合奏」活動の本質はハーモニー(調和)であり、保育者を目指す学生にとって音楽活動を通して人間関係の調和を実体験することは非常に有意義であると考えられる。四つ目「音楽行事」では、上田市内保育園のお遊戯会の映像を鑑賞しながら、保育行事における保育者の役割を考えていく。ここで鑑賞する内容は、0.1歳児・2歳児・3歳児・4歳児・5歳児の5クラスにおける〈歌〉・〈オペレッタ〉・〈身体表現〉〈音楽に合わせたダンス〉の発表で、年齢に応じた音楽的発達の様子を学んでいくものである。また〈オペレッタ〉は、台本・台詞・動きといった劇の要素と、歌などの音楽的要素が融合した活動で、保育者になると発表の準備にはかなりの時間と労力を要する。子どもへの歌や台詞、立ち回りなどの指導を始め、伴奏の練習、舞台や小物・登場人物に合わせた衣装の制作まで、映像を鑑賞しながら事前に必要な準備について考えさせ、保育者には活動を運営するために幅

広い知識と指導力が不可欠であることを学んでいくのである。またそれらの映像から指導が適切な例と不適切な例や、年齢を考慮しない選曲の例などを取り上げながら指導方法の重要性に触れ、特に保育現場に多くみられる「どなり」歌い＝「元気の証し」ではないことなどを伝えている。

このように「音楽表現指導法」の授業は、保育者が日々の保育や園の行事の中でどのような音楽活動を行い、いかに子どもに指導していくかその基本的な考え方と実践指導力を習得することが授業の大きな目標なのである。

3) 授業アンケートから見えるもの

本学では大学教育の質を高める為の FD (Faculty Development) 活動として、期末毎に授業アンケートを実施している。その内容は、授業を客観的に 5 段階評価する 11～13 の設問と自由記述欄から構成されるが、本節では過去 3 年間の「音楽表現指導法」の授業アンケートより、自由記述欄に書かれた内容をいくつか取り上げ、学生の実感として本授業の目標がいかに達成されているかどうかを探ってみたい。

自由記述欄には、「みんなとても楽しそうにやっていました」、「手あそびをたくさん知れて楽しかった」といったやや幼稚なものから、「人前で発表して緊張したが、何度も経験して度胸がついた」、「(発表を経験して) 実習に出たときの心構えができた」、「習った手あそびやペープサートを実習に役立てたい」といった、夏期休暇中に行う初めての教育実習に照準を合わせ実習生としての自覚が備わったことを伺わせる内容もあった。また「リズム譜の書き方や、合奏編曲の方法を学べた」、「いろいろな歌の教え方を勉強した」、「子どもに歌を教える際に間違った例を示してもらったので参考になった」、「動作一つ一つや、言葉かけの大切さを学んだ」といった指導方法に関する記述や、「保育者という立場で考えなくてはいけないことを学んだ」、「音楽を通して幼児とどう関わっていくかが分かった」といった、学生自身の中に保育者としての視点が備わった記述も見られた。更には「音楽を通してコミュニケーションがとれた」、「音楽の新しい見方ができるようになった」といった音楽の本質部分に触れるような記述や、授業を通して新しい視野が広がったとの記述も見られた。

このように、同じ 15 回の授業を受講しながらも学生の習得度は大きく異なるようである。講義科目と違い演習科目では実技が伴う為、学生の理解力の差に加え、音楽ではピアノの技術や歌唱力・音感などの能力や入学前の経験の有無が技能習得に大きく左右する。また保育現場における音楽活動では子どもにどう見せるか(魅せるか)といったパフォーマンス力も必要になる。実技力の個人差がある中で授業で取り上げた専門知識はごく基本的なことにすぎないが、授業を通して「教わる」側から「教える」側へと学生の意識が変化したようである。

3、養成校における音楽技術の育成について

1) 保育現場で求められる音楽技術

本稿では保育現場における音楽活動を数々取り上げてきた。学内の授業「器楽(ピアノ)」や「声楽」の実技のみならず、「音楽理論」で学習する楽典の理解や記譜が正しくできないと歌を移調したり合奏曲を編曲することは難しい。学生は音楽技術＝ピアノと短絡的に考えやすいが、むしろそれ以上に正しい音程で音楽的に歌える「歌唱力」や、音価やリズムの理解など読譜や記譜に関する「音楽理論」の知識の必要性をどれほど理解しているだろうか。保育現場における音楽活動は、1) で述べたとおり「音楽」の垣根を越えた広範的な活動である為、学生には音楽の実技と理論をバランスよく習得し、加えて子どもの視点に立って正しく指導する能力がないと音楽活動が円滑に行えないものである。そこで本節では保育者に対する調査を基に保育現場で必要とされる音楽能力を探ってみたい。調査は平成23年8月、上田市内M保育園に勤務する保育士15名から、アンケート及び聞き取りにより回答を得たものである。

■ 保育現場に必要な音楽技術

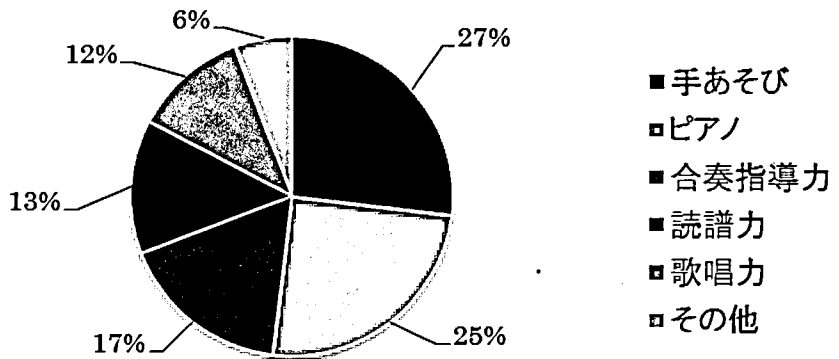


図1 保育者が考える保育現場に必要な音楽技術

ここでは、「保育現場で特に必要だと考える音楽技術は何か」の問いに、手あそびのレポートリーの豊富さを一番に挙げる保育者が多いことが分かる。次いでピアノの技術、合奏の指導力、読譜力、歌唱力と続いている。実技に関する手あそび・ピアノ・歌唱力は全体のほぼ三分の二を占めており、保育現場では即戦的な実技力が求められていることがわかる。一方でその他の回答では「音楽が大好きという保育者の心持ち」、「音楽を楽しもうという気持ち」など、音楽の技術云々よりまず保育者自身が音楽活動を楽しむことの重要性が挙げられた。これらの回答は保育歴が10年以上で主任等役職に就く保育者によるものが多く、音楽の本質を理解したもので非常に興味深い結果となった。

■もっと学んでおきたかった音楽技術

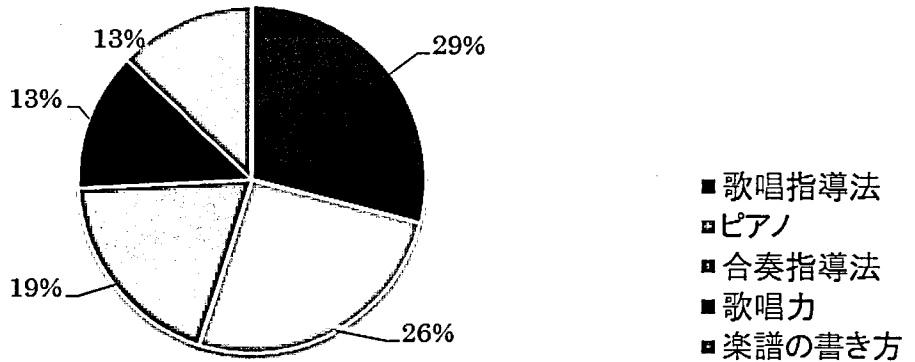


図2 学生時代にもっと学んでおきたかった音楽技術

こちらの問いに関しては歌唱指導法が一番に上がり、次いでピアノ技術、合奏の指導法、歌唱力、楽譜の書き方の順になっている。ピアノや歌唱力といった実技面は三分の一程度だったのに比べ、指導方法に関する歌唱指導法と合奏指導法が全体の約半数を占めている。つまり保育現場ではまず実技（手あそび・ピアノ・歌唱力）の即戦力が必要ではあるが、子どもの音楽活動を運営する為に必要な指導方法を学生のうちに学んでおきたかったという声が多いことが分かった。特に歌に関する歌唱指導法と歌唱力を合わせると42%にも及び、調査では「自分に歌唱力がないから歌唱指導に自身がない」、「歌詞の意味を説明するのが難しい」など、回答から保育歴が5年未満で比較的経験の浅い保育者が歌唱指導に難しさを感じているようである。また、合奏指導法を学んでおきたかったという回答には付随して「アレンジした曲やリズムの書き方がよく分からない」といったように、楽譜の書き方（＝記譜）の問題を挙げる回答が多かった。記譜に関しては、例えば四分の四拍子の一小節間に何拍入り、そこに収まるリズム群が何拍に値するかといった音価を理解していないと、「耳で分かっているけど楽譜に起こせない」といった事態に直面するのである。特に保育現場では既存の楽譜をそのまま用いることは少なく、年齢やクラスの特徴、また使用楽器の構成により楽譜を書き変えることの方が多く、現場に出て初めて音価の理解や記譜に関する「音楽理論」の大切さに気付くのであろう。いずれにしても、養成校で学習する期間はあまりに短く、保育技術をすべて習得するには十分とは言えないため、卒業後保育現場に出てからも研修会などに参加し、継続的な学びを深めていくことが重要である。

2) 養成校における課題とまとめ

ピアノや声楽の実技面の技術は経験によって補われる事もあるが、調査では保育現場では歌や合奏をいかに子どもに教えるかといった指導面に悩みを抱えている保育者が多く、養成校における技術の修練もさることながら、指導法や音楽理論の学習の重要性も明らかとなった。現

学生を見ていても「ピアノの技術は保育現場には不可欠」との意識はあるようだが、同様に「声楽」や「音楽理論」、「音楽表現指導法」の学習内容が保育現場に出たときにいかに必要になるかを理解している学生は少ないようである。本学の音楽カリキュラムを見てみると、入学直後の一年次前期に「器楽」、「声楽」、「音楽理論」、「音楽表現指導法」が開講され、実技と理論、指導法を同時に学習する仕組みになっている。カリキュラムや時間割上の諸問題があつてのことであるが、例えば「器楽」・「声楽」⇒「音楽理論」⇒「音楽表現指導法」のようにこれら科目の履修順序を段階的にすこし工夫できないだろうか。四月、養成校に入学した学生は「教わる側」として自身のピアノや声楽など実技力の習得を始める。そして学内での学びと実習を積み重ねながら意識を徐々に「教わる側」から「教える側」へ変化させていく。保育者としての自覚が備わり実技の土台が完成されて後、「教える側」に必要な理論や指導論を学ぶことで、授業の意味と必要性を理解でき学びを深めることができるのではないだろうか。ここに挙げた音楽科目はそれぞれが独立したものではなく、特に保育現場では有機的に作用しているため、まず実技力の鍛錬、そしてそれを裏打ちする理論の理解、それから実践指導力の習得というように、段階を付けて学習することは有意である。そして学生に技術のみならず、理論や指導方法の習得が現場ではいかに重要であるかを伝え、授業では模擬保育のように実際に指導を経験させることが大切である。声の大きさや視線は適切であるか、年齢を配慮した活動であるかどうか、説明は十分であったかなどを、学生同士参観しあいディスカッションさせることで、今の自分自身に何が足りないのかに気付かせ課題を持たせることができる。養成校における音楽カリキュラムの履修順序の工夫と、授業内における実践経験の積み重ねによって、2年間という短期間でも音楽実技力と理論、そして指導力の育成が可能であると考えるのである。

また先の調査において、音楽活動の悩みや指導面での苦労を自由記述で尋ねたところ、「うまく音程が取れないので、自分も小さいころから音楽に触れていればよかった」、「ピアノかなど集団の中でもっと個別に手を入れてあげたいがゆとりがない」、「音楽に対して興味を持ったり、落ち着いて活動に取り組める子どもが少ない」、「園児の集中力の無さ」、「楽器を粗末に扱う」、「音楽を通して“楽しい”と思える活動作りはできるが、音楽を“美しい”と感じさせる心を育てていくのは難しい」など、実技や指導法に関する悩みに加え情操面を育む指導の困難さや、現在の保育事情や現代っ子特有の問題が挙げられ、保育現場が抱える諸問題がそのまま音楽活動にも反映しているようである。

本授業は、学生の「保育者になる」という自覚と専門知識が未熟な状態から始まる為、15回の内容では一年次夏期の教育実習に向けた準備（手あそびやペープサートを使用した歌唱）に偏る傾向にあり、保育者に必要な音楽指導力を全て習得することは難しい。従って学生に短大生活残りの期間で音楽の何を如何に学んでいくべきか、今の自身に何が足りないのかに気付かせ、今後は自らが課題を持って学んでいくというスタート地点に導く役割が大きいように思われる。今後「音楽表現指導法」の授業内で実践形式の発表の場を更に増やし、グループディスカッションを通して学生の音楽に関する実践指導力の向上を目指していきたい。

本稿では、保育現場における音楽活動を取り上げ、保育者に求められる音楽実技力・音楽指

導力について探り、養成校における授業改善について考察をしてきたが、一番大切なのは音楽表現を指導する為にはまず学生自らが音楽を楽しむという態度を身につける事なのかもしれない。音楽の素晴らしさや人々に訴えかける力の奥深さについて、如何に学生に伝え共感させていくか課題である。

参考文献

黒川健一編 保育内容「表現」 ミネルヴァ書房 2004年

花原幹夫編著 保育内容 表現 北大路書房 2009年

平田智久・小林紀子・砂上史子編 保育内容「表現」ミネルヴァ書房 2010年

謝辞

本研究を行うにあたり、財団法人極楽寺愛育園みのり保育園の先生方にはアンケートにご協力を頂きましたこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。